

やはり木材が良い

北海道林務部 林産振興課

主査 沢口 晃



節のある壁材，木質フロアーを採用したフリースペース
(前田中央小学校 札幌市)

木造化に向けて行政としての対応

学校は，児童生徒の教育・学習の場であるとともに，児童生徒の生活の場であることから，それにふさわしい，ゆとりと潤いのある環境として整備されることが必要であるとの観点から，文部省は，昭和 60年8月，各都道府県教育委員会教育長あて，

木材は，柔らかで温かみのある感触を有するとともに，室内の温度変化を緩和させ，快適性を高める等の優れた性質を備えていること，

特に，建築仕上げ材として，適所に木材を使

用することにより，温かみと潤いのある教育環境づくりが期待されること，

地域の風土や文化，産業に即した施設づくりという観点から，建物の規模，用途に応じて木造建物を計画することも意義のあること，等に留意し，積極的に木材を使用するよう呼びかけ，61年度より 木造建物の補助単価の引上げ（鉄筋コンクリート造と同額まで），内装等に木材を使用する場合の補助単価の加算（上限 1割）の継続，「木の教育研修施設」に対する補助を行う等，所要の措置を講じてきています。

道（林務部）としましては、木材需要の拡大を図るため、庁内の関係部（課）で構成している「木材利用推進連絡協議会」を通じ、道教育委員会へ、高校の木造化について要請を行っておりますが、着実に体育館等の木質内装化が図られてきています。

一方、小・中学校については、北海道木質材料需要拡大協議会と密接な連携をとりながら、木造化への気運醸成に努めるとともに、各市町村の理事者に対しては、各支庁と地元木材関係業界とが一体となり、理解を深めていただくための要請活動を展開しています。

本道は、学校数で全国一の木造化

こうした文部省の施策に呼应し、校舎をはじめ屋内体育館などの木造化が全国的な規模で拡がりを見せ、本道にあっても、61年度に置戸町の境野小学校（469㎡）、滝上町の白鳥小学校（750㎡）が木造で校舎を建設。62年度に入り、主なところでは紋別市の藻別小学校（615㎡）、弟子屈町の昭栄小学校（578㎡）、さらに滝上町の札久留小学校（668㎡）、で木造化が図られています。

これを全国規模でみますと、事業量は62校、31,122㎡となり、前年度比（61年度比）で、学校数は2倍、面積は70%増にのぼっております。

さらに、昭和60年度から62年度の3か年の累計でみますと、全国で111校、55,162㎡の中、本道は18校、4,081㎡と、学校数では全国一、面積では、岩手（9,735㎡）、秋田（6,322㎡）に次いで3番目となっております。

なお、全く木造化への取り組みを行っていないところが、14都府県ありますことを参考までに付記しておきます。

いま、教育現場でも真剣に木の見直し

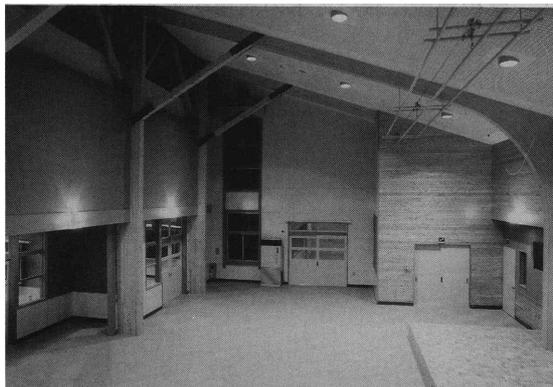
では、教育現場ではどのような考え方をもっているのでしょうか。いろいろな校舎を経験した、札幌市の曙小学校の菅原友子教諭は、子供の情操教育を含め木の良さを「いまの子供は遊ばない、働かない、とよくいわれます。しかしそれは大人

1988年7月号

がそうさせたという一面があります。フローリングでない床で跳んだりはねたりすると、ケガをしまう子供が多いために、心ならずも注意を与え、抑えてしまいます。もし木の床だったら活発な運動をさせてあげられます。体が未発達で、調整力のない子供のうちは、伸び伸びと自由にさせてあげることが大切です。」と、健康と安全、感受性の豊かさを養う教育環境には、もっと木を使うべきだと述べています。さらに、生徒の勤労意欲の面でも、木は貴重な仲間だちになっていると補足しています。それは、木は他の材料にくらべて掃除が簡単なばかりでなく、磨けばみがくほど光沢が出て、いまはあまり見なれない拭き掃除などを通して、自分達の校舎を大切にしたいという意欲と、そうした勤労のよろこびを味わうことができると思います。



在来軸組による木造校舎
（藻別小学校 紋別市）



構造用集成材の見える多目的ホール
（昭栄小学校 弟子屈町）

また、床をフローリングでまとめた新設の札幌市前田中央小学校の場合は、多目的に使用するフリースペースとワークスペースの2か所に木を取り入れています。渡辺哲也校長は「木の床は親しみやすく、広い床が必要な習字の学習などにはとても便利です。床に座ると言う習慣のなかった子ども、抵抗感なく座り、その良さを生かして、みんなで座ったままのホームルームも行っています。」と感想を述べ、フローリングに座って、図工や音楽学習も行い、自由空間を木でまとめた室内環境には満足気です。

「ほっとする、くつろげる、楽しめる、明るい、柔らかい、温かい、気楽」

これは、同小学校で実施した木に対する生徒のアンケート結果です。

このように、現在、学校教育の現場で真剣に木が見直されております。

新たな推進方策への取り組み

こうした中であって、文部省は、昭和62年9月、次のような木造校舎の推進方策に関する調査研究に着手しましたが、3か年にわたるこの調査の成り行きに期待したいものです。

趣旨

学校施設は学習の場であるとともに、児童生徒が1日の大半を過ごす生活の場であることから、それにふさわしい、ゆとりと潤いのある環境を確保することが必要である。そのための一方策として、学校施設において木の活用が考えられる。

こうした観点から、木造校舎を推進するため、木造に関する技術的諸課題を中心に総合的な調査研究を行う。

調査研究事項

- ・木造校舎の推進方策に関する調査研究
- ・木造校舎の構造、防災、経費に関する調査研究

- ・その他必要な事項

実施方法

学識経験者の協力を得て調査研究を行う。

実施期間

昭和62年9月1日から昭和65年3月31日までとする。

昭和63年度研究費

400万円

おわりに

いずれにしましても、校舎の木造化は、各市町村の教育委員会教育長をはじめとする理事者の方々のご理解があつてこそ実現が図られるものであり、特に、林産業を基盤とする地域にあつては、地域振興の上からも、是非とも取り組んでいただきたいものです。

また、21世紀の担い手であるお子様をおもちの父母のみなさまには、温かみと潤いのある教育環境づくりのため、市町村理事者との対話やPTAなどの場で、木造化について真剣に話し合つてみられてはいかがでしょうか.....。

